

♪ シャボーという名の～ あなたを訪ねて～



カット●竹口義之

東江一紀

ただし、作業の能率はほとんど落ちてきていて、このところ、ノルマの月産千枚には遠く及ばない。要するに、わたし、ただ弛緩しているだけなのでしょいか。

その弛緩を見透かしたように、ある翻訳権エージェント氏が「仕事で近くまで来たので」と、わが舎房に立ち寄った。あ、そう、そう、この舎房って言葉ね、小嵐九八郎さんの『刑務所ものがたり』（文藝春秋）に出てきました。以来、仕事を舎房と呼ぶことにして、「シャボーって、フランス語？」と妻にからかわれてます。♪シャボーという名のくあなたを訪ねてく、って歌もあつたな。おっと、くだらん洒落を言ってしまった。この部分、目をつぶって読んでください。

で、そのエージェント氏の来訪をです、囚人は刑務所特製の粗コピーで接待いたしました。言うなれば、娑婆から来た面会人だな。ひとしきり雑談に興じた。エージェント対翻訳者だから、当然、業界の話、本の話が中心になる。関心のある分野の新聞が話題のぼると、こちらもついつい膝を乗り出してしまふのだが、だめ、だめ、今の境遇を忘れちゃいかんよ。つい十日ほど前に、油断したすきを突かれて、長い長い国際謀略小説を引き受けたばかりじゃないの。その前の週には、ようやく訳し終えた地獄の二丁目原稿を

わたし、まだまだ塀の中にいて、地獄の三、四、五、六丁目をよたよたと千鳥足で徘徊いたしております。

つまり、四冊の本の翻訳が同時進行中で、というより、催促されることにあつちに手を付け、こっちに戻りと、必死にジャマイカを、じゃない、キューバをしのいでいる状態で、

日々ぎりぎりの崖っぷち、冷や汗のかきどおしなのだ。せわしいったらありやしない。

でも、まあ、この自主懲役生活も五か月めに入り、身も心もすっかり囚われ人となって、一種の安定状態ではあります。あんまりつらく感じないのね。あたりまえのように刑に服し、罪を償う毎日だ（なんの罪だろう？）。

届けに行き、打上げの酒を飲んで、ほろ酔い気分、シリーズもの二冊をほいほい引き受けちゃった。一冊終えるごとに三、四冊新たにかかえこんでたら、未訳本の山が高くなるばかりだろうが！

というわけで、何点もの話題作のタイトルを、わたしはまるで耳が遠くなったかのように聞き流し、かわりに、脳裏に深く刻みつけたのだった。いやあ、拷問ですよ、これ。

とにかく、「読ませて」と言いたくなるのを懸命にこらえて、わたしは面会時間乗り切った。そして、エージェント氏が立ち上がる。わたし、玄関まで見送る。

「実は、読んでいただけこうと思ってた本があったんですけどね」と、帰りがけの刑事コロンボみたいにエージェント氏が言う。やな予感。「お忙しそうだから、またにしましょう」

ほっ。そうしてくれると、助かるなあ。暇になつたら、何冊でも読むからさ。「でも、本は置いていきますね」こら、置いてかないですよ。「読まなくても結構ですから」そんなこと言ったって、こっちは困るんだけど……おい、あららら、行っちゃった。

正面切って読んでくれませんか頼まれると、断わりやすいのだが、読まなくていいと言われて本を預けられたりすると、妙に責任を感じます。自分が読むことによってこの本

を幸せにしてやれるんじゃないかと、ヒロイックな気持ちに襲われるのね。

でも、今のわたし、目いっぱい仕事をかかえた自主懲役の身の上だ。ここで原書を一冊読んで、もしつまらなかつたら、貴重な時間をむだにすることになる。もしおもしろくない。これ以上翻訳を引き受けるわけにはいかない。いずれにしろ、読んで得することは何もないのだ。

てなわけで、せっかくだけど、この本は読めません。ま、表紙ぐらいは見ようかな。へえ、「愛の力についての奇跡に満ちた小説」だって。少年が肩に鶏をしょってる。ふむふむ、自身は、と……百五十ページしかない。

翻訳原稿にして、四百枚弱。「空が見ていることを、少年は知っている。何を見ようとしているかも、知っている。長い時間、少年は戸口に立って耳を澄ませ、ドアのすきまから空を眺める……」おい、おい、訳し始めてどうするんだ！

これがいかんのだよな。横のものをみると、すぐ縦にすたくなってしまう。こないだも、横断歩道をつい縦断して、ダンプリンに轢かれそうになりました、って、そりゃうそだけど、原書を目の前に差し出されると、淫蕩な血が騒ぎ出してしまうというこのビョーキこそが、今の懲役生活を生み出したそも

その罪状ではないか。うーむ、更生への道は遠く険しい。

これは、しかし、どうもわたしだけじゃなさそうです。前号のこのページを読んだ同病の同業者、いや、同業の同病者（どっちでもいいか）伏見威蓄さんから手紙が来て、やっぱり自縄自縛の「めっちゃすけじゅーる」に苦しんでいるという。よし、それじゃあ、というんで（この辺が、ちと論理性を欠いているのだが）、同病の友を募って、《翻訳者プリズン・クラブ》を結成することになりました。くそ忙しいと言いながら、こういう話になるとすいすい運んでしまうところが、ビョーキのビョーキたるゆえんだらうか。

このクラブの入会資格は、上下本を訳した実績があること、太陽の光を浴びる時間が一日二時間未満であること、働かすぎで世間から白い目で見られていること、総会開催の折には各自の属する刑務所からただちに脱獄してくること、であります。条件を満たす翻訳者の皆さんは、むだな抵抗をやめて、いさぎよく自首するように。

伏見さんが牢名主になって、第一回総会の準備を進めているところで、ひよっとするとその総会がいきなり解散集会になったりするかもしれないけど、まあいいじゃないの。自主懲役生活者に、失うものはない！